

日本音楽教育メディア学会
(JAPANESE MEDIA SOCIETY FOR MUSICAL EDUCATION)

JMSME News Letter

2021.7 vol.13

発行：令和3年7月15日
日本音楽教育メディア学会事務局
〒125-0062 葛飾区青戸5-5-16
メールアドレス info@jmsme.org
ホームページ
<https://jmsme.org/>

～1年を振り返って～

会長 田中 功一

コロナ禍が続いており、先生方にはご苦勞の多い毎日かと思います。特に実習や実技を伴う授業をお持ちの先生方のご苦勞は想像以上かと思います。私のことで恐縮ですが、昨年、自宅のピアノ個人レッスンをオンラインで戸惑いながら始めました。これは一对一の指導ですが、集団授業となると、相当な困難が生じると思います。このような不自由な状況下ですが、自分なりに学んだ点が二つありました。

一つ目は、新しい視点の発見でした。オンラインによるピアノ個人レッスンで、Web カメラを3台用意し、天井（上部から鍵盤と手を撮る）と正面（教師の顔を撮る）と楽譜の投影を切り替えながら進めました。中でも天井に吊したカメラには、親指の細かな動きや腕全体の動きまでとても分かりやすく映りました。日頃のレッスンでは生徒さんと横並びの視線で指や腕の動きを見ていましたので、これまで見落としていた親指の動きなどの問題点を上部カメラはハッキリと捉えていたのです。上部からの映像を生徒さんに配信したり、メディアに記録して手渡したり、有効活用の可能性も考えられます。オンラインレッスンの試行錯誤の中で発見した ICT 活用術です。

二つ目は、Zoom を使用したオンライン会議や打ち合わせの方法を知ったことです。このようなツールの存在をコロナ禍で初めて知りました。自宅に居ながら多くの方々とコミュニケーションが進められます。これまで対面で進めてきた打合せの多くがオンラインで可能かもしれません。あらためて、対面で行うコミュニケーションの価値を再認識いたしました。

これらはコロナ禍で私が学んだことですが、コロナ終息後も新しいスタイルとして定着するように感じます。メディアと関わる私たちは、むしろ積極的に関わりたいと思います。

さて、私が会長を拝命して1年になります。以前に申し上げましたが、任期中に学会の発信力アップを目指しています。具体的には二点あります。第一はホームページの発信です。昨年全面リニューアルして、先生方の論文などを公開しており、それらは全文検索の対象になります。先生方の業績報告などにご活用下さい。ホームページについて何かご意見がございましたらお寄せ下さい。

第二は J-STAGE による論文の発信です。この魅力は早期公開です。冊子の論集は3月末の発刊ですが、本学会では査読終了・受理後に論集発刊に先立って早期公開となります。J-STAGE の公開は2年目になります。アクセス状況は毎月学会事務局に通知されます。今年6月のアクセス状況は、全体で書誌事項が315件、全文 PDF が175件でした。また、先生方の論文の引用も増えてきています。J-STAGE は論文の発信力としてパワフルですが、論文の質が学会の評価に直結します。次の論文から J-STAGE 公開論文を外部査読とすることが理事会で承認されました。

先生方には、ホームページの発信、または J-STAGE 公開をご活用いただきたいと思います。また、このような発信に興味を持っていただける先生方がいらっしゃいましたら是非お誘い下さい。

日本音楽教育メディア学会

第8回総会・第13回研究会のご案内

日時：2021年8月9日（月・祝）

11：00～12：00 総会

13：00～16：30 研究会

場所：葛飾シンフォニーヒルズ 別館 2階 ビジュアルルーム
会場とオンライン（zoom）でのハイブリッド開催となります。

参加費：会員無料 非会員 1,000円（事務局に参加お申し込みください）
事務局：info@jmsme.org

🎵研究会プログラム

- 13：00 「歌うことを優先させた「弾き歌い」のピアノ指導について
ー保育者養成校のオンライン授業からー 林 麻由美（東京福祉大学短期大学部）
- 13：30 「発声医学体操を用いた歌唱指導に関する研究」
松田扶美子（有明教育芸術短期大学）
- 14：00 「ICTを活用した「音」表現について」
ーZoomとサウンド編集ソフトの活用ー 小林田鶴子（神戸女子大学）
- 14：45～15：30 レクチャー「保育・教育現場での楽しい表現活動」
飯泉祐美子（帝京科学大学）
- 15：30～16：30 情報交換会

🍉学会トピックス

- 8月9日の総会開催に際し、会員の皆様にはご出欠の回答をどうぞよろしくお願い致します。
- 当学会の論集「音楽教育メディア研究」第8巻（令和4年3月発行）の投稿申し込みは8月31日となります。投稿をご希望される方は、ホームページの申込書よりお申し込みください。また投稿のスケジュールもホームページにてご確認ください。

~COLUMN~

今年の春、コロナ禍でオンラインレッスンや動画配信が主流になる中、知人から話をもらい、オンライン講座のお手伝いをした。

来日予定だった教授たちの公開講座を、動画配信の形で行おうという企画である。私が請け負ったのは、ミュンスター音大で教鞭をとるアルニム教授の講座で、「24の調性とその色彩をめぐる」というものである。講座は、実演を伴いながら、調性1つ1つを解説していくものだった。

長調編がおよそ100分、短調編がおよそ120分という長大な講座で、その翻訳には膨大な時間を費やした。そもそも、講座の内容に質問事項など出れば、時差を考慮して、真夜中に電話で質問することになる。送られてくる動画は原稿もなく、口語調なので、文脈も右往左往する。しかし、その内容は非常に興味深く、演奏に役立つヒントが多く集められていた。

世界は非常に狭くなった。地球の裏側での出来事が、すぐそこにある。

編集にあたっては、私の知人が尽力を尽くした。文節ごとに対応する訳をあてはめ、字幕にしていくな作業は、0.001秒単位で精密に行われていった。コロナ禍になるまでは、一介のピアノ弾きだった私たちが、パソコンを目の前にして、一音も音を出すことなく音楽の神髄を世界に向けて伝えようと悪戦苦闘した。これからの音楽家に必要なものは、メディアとの上手な付き合い方であることは間違いないだろう。

ご興味のある方は、「長谷川ゆき音楽研究室」で検索してもらいたい。

武蔵野音楽大学 森永美穂子



連載「子どものうた」

「学校唱歌」と「学校音楽」今と昔

「唱歌」というと「文部省唱歌」をイメージされる方が多いかと思われる。この「文部省唱歌」は「学校唱歌」と言われ、学校の中で歌う歌として成立した。なぜ、学校で歌うための「歌」の成立が必要であったかということ、当時「修身」と「唱歌」は「徳性の涵養」、「国民国家形成」、

「愛国主義」と「思想」を育てるものであったからだ。そのため、「学校唱歌」は「季節」「風景」の描写は日本のどこのものでもなく、特定の地名を歌詞には反映しなかった。これは当時、全国津々浦々、どこでも共通の質の教育を提供するためという、作為的な思惑があったためである。反面、「鉄道唱歌」など「学校唱歌」以外の唱歌は、地名やその土地の特徴や景観を歌詞としてたくさん盛り込んだ。そのため「学校外唱歌」はかなり熱狂的で、多くの人々に愛好された。

この「学校唱歌」と「学校外唱歌」の状況は、「学校音楽校門を出ず」といわれる現代の「学校音楽」や「学校外の音楽」も同様の傾向があるように思う。しかし、根本は何か違う。

「唱歌」はある年齢層より上の世代では、歌ったり、聴いたときに、過去を回想し、懐かしみ、涙する。この心情は過去を回顧することからくるものと想像できるが、現代に生きる子どもたちは、果たして将来、年齢を重ねたのち、「子どものころに歌った歌」を歌ったり、聴いたときに、過去を回想し、懐かしみ、涙するのだろうか？

この答えは「豊かな情操」をどう育てるにかにかかっているのではないだろうか。

帝京科学大学教育人間科学部教授 飯泉祐美子

《会員メッセージ》

岡田 愛（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科）

昨年度より入会させていただきました。素晴らしい先生方のお仲間になれることは、大きな幸せです。2021年2月には、研究会に参加し、先生方のご発表に多大なる刺激を受けました。また私自身も口頭発表の機会をいただき、多くの先生方から貴重なご意見を頂戴しました。

私はもともと作曲を専門として学んでおり、総の国童謡作詞・作曲コンクールでのご縁が、入会のきっかけとなりました。今後の目標は、教育界に貢献できる曲を作曲していくこと、そして自身の作曲活動での学びを、子どもたちの創作指導へと生かしていくことです。これまで学ばせていただいたことを、教育者として子どもたちに還元し、研究を深めることを通して社会に貢献したい気持ちでいっぱいです。

現在の研究においてとくに力を入れているのは、音楽づくり活動における子どもたちの創作過程についてです。近年は音楽教育のICT化も急速に進んでおります。メディアといえばICT、そんな風潮も感じられますが、学会の考え方が広義であることに惹かれます。メディアが、「媒体」の意味を包含する多様な“もの”や“形態”を一括するもの」と定義されるなら、私は、あらゆる媒体が子どもたちの音楽づくり活動においてどのように機能しているのか、その過程そのものを追っていきたいと考えております。

《会員メッセージ》

後藤友香理（静岡大学）

昨年度、日本音楽教育メディア学会に入会させていただきました、後藤友香理と申します。2月の研究会で発表させていただき、ありがとうございました。

静岡大学教育学部に勤務し今年で8年目となります。学生時代はピアノを専攻し、演奏研究や作曲家作品研究が主な関心事でしたが、勤務先の状況に合わせ、現在は教員養成課程における実技指導や、音楽科における言語活動に関する研究も行っています。その一方で、専門家（演奏家）の身体技能の獲得プロセスや、音律の違いによって生じる演奏の心理的印象など、やはり自分がこれまで行ってきた「演奏」に寄せた研究も続けており、プライベートでは2人の未就学児を抱え、頭の中も家の中も常にグチャグチャです。

音楽や音楽教育に関する学会は多くありますが、それぞれ傾向や分野の偏りがあり、似たような話題や仲間が集まりがちです。その点、「メディア」と「音・音楽」との関係を広く切り口とした本学会は、様々な分野の方が集まり、新しい視点から音楽や音楽教育を捉えることができる貴重な場だと感じております。皆さまにご教示いただきながら、研究を深めていけたらと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

会員揭示版

TTAA 東京国際芸術協会芸術公演助成事業

飯泉琴都 & 坪井一真

デュオリサイタル

DEPARTURE MONUMENT 未来へ向かって♪

飯泉琴都
Koto Iizumi, Soprano
第28回、第30回全日本ジュニアクラシック音楽コンクール声楽部門奨励賞受賞。
2018年海外音楽大学マスタークラス派遣オーディション合格。ウィーン国立音楽大学に派遣留学。武蔵野音楽大学音楽学専攻卒業。現在同大学院音楽研究科修士課程音楽専攻1年次在学中。これまでに声楽を三ツ矢淳子、佐々木典子、佐橋美起の各氏に師事。

坪井一真
Kazuma Tsuboi, Tenor
愛知県出身。4歳よりバイオリンを始め、高校時代より声楽を習う。これまでに声楽を友森美文、樋口達哉、福井敬の各氏に師事。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。現在同大学院音楽研究科修士課程オペラ専攻1年次在学中。安宅賞受賞。令和2年度公益財団法人山田真夫音楽財団奨学生。

武蔵野音楽大学
Daisuke Munon, Piano
武蔵野音楽大学作曲コース卒業。現在、同大学院修士課程作曲専攻1年次在学中。作曲を伊藤光介、花山紀昭の両氏に師事。ピアノを谷口豊、遠藤裕子の両氏に師事。これまでに、「武蔵野音楽大学附属高等学校平成28年度卒業演奏会」「第21回武蔵野音楽大学附属高等学校在校生と新卒生によるコンサート」などに出演。

2021年9月4日(土) 13:30開演(13:00開場)
東京・日暮里サニーホールコンサートサロン
全自由席 2,500円
チケットご予約・お問合せ: 東京国際芸術協会 03-6806-7108 www.ttai-jp.com
主催: 一般社団法人 東京国際芸術協会 後援: 東京音楽学院

飯泉琴都さん（飯泉先生の御息女）のコンサートです

第4回総の国 童謡作詞・作曲 コンクール作品募集

【募集期間】 2021年9月1日(水)～10月31日(日)
(当日消印有効)

【参加資格】 小学生以上(学校等団体応募も可)

【応募先】 〒270-0023 松戸市八ヶ崎 7-32-24
八ヶ崎郵便局留

「第4回総の国童謡作詞作曲コンクール実行委員会」
谷中宛

【主催】 音・音楽フォーラム松戸
【発表】 2022年1月、Facebookや「音・音楽フォーラム松戸」HPその他のメディアに発表予定。また入賞者には直接通知する。なお入賞者には改めて楽譜・歌詞カード等のデータを提出のこと。(詳細はメールにて連絡する)

【問合わせ】 (E-mail) oto.ongaku.forum@gmail.com
yanak_ayu@yahoo.co.jp

<https://yanakayu6.wixsite.com/musicforum-matsudo>

※募集期間や募集内容が前回と異なりますのでご注意ください

会費納入のお願い

●今年度(2020年8月1日～2021年7月31日)の年会費(正会員)7,000円、(学生会員)4,000円をお願いいたします。

●来年度(2021年8月1日～2022年7月31日)の年会費の納入は12月末日までをお願いいたします。

《振込先》 ゆうちょ銀行 10510-91267401

他銀行よりお振込みいただく場合: 店名 058 店番 058 (普) 912674

二ホンオンガクキョウイクメディアガッカイ

※入会・退会に際しまして、又、会費についてご質問等ございましたら事務局までご相談ください。

事務局だより

新型コロナウイルスが依然として猛威を振るっております。その中で東京オリンピック・パラリンピックは史上初の無観客での開催が決定されました。人々がメディアを通してのみ見守り声援し参加する「メディア・イベント」としてのオリンピックです。通常とは違う環境の中で選手たちはどのように力を発揮できるか、私達の声や気持ちは選手に届くのか。その本質は競技場にあるのか、映像を見つめる一人ひとりの体験の中にあるのか。音楽・教育・メディアにも通じる実験として注視したいと思います。ニュースレターVol.13をお届けいたします。皆様、どうぞお身体にお気をつけてお過ごしください。(事務局: 兼古勝史、鎌田千佳、林麻由美)